

特集

心肺蘇生は

“わかっていないこと”だらけ!?

臨床ガイドラインは、確実なエビデンスに裏づけされていることが大原則です。しかし、であるからこそ、ガイドラインの推奨・提案の内容は、臨床上の具体的手続きがどうあるべきかについて不明なものも少なくありません。このような傾向は、RCTなどによって臨床に則したエビデンスを得ることが難しい心肺蘇生の領域において顕著と考えられます。心肺蘇生に関するガイドラインで推奨・提案されている内容だけでは、現実の対応に空白部分が生じざるを得ず、そのような空白の一部は good practice statements, あるいは過去からの“言い伝え”であるところの grandfathered recommendations である程度埋めるのが精々というのが現状です。

すなわち、重厚で精緻なガイドラインの存在する心肺蘇生領域も、現実的には“わかっていないこと”=「研究等がほとんど行われておらず、本当の意味でわかっていないこと」や「推奨や提案はなされているが、その内容には課題が多い、あるいはエビデンスが不十分と思われること」が数多くあるといえます。これは決して、ガイドラインが不十分であるという言説ではありません。また当然ながら、ガイドラインの重要性を否定するものでもありません。基礎となるガイドラインがあるからこそ、“わかっていないこと”が浮き彫りになり、そこに臨床的な工夫の余地や、改善・発展のための方向性、魅力的な研究のテーマが見出されていくはずで

そこで今号の『救急医学』では、この心肺蘇生領域の“わかっていないこと”を、“わかっていないなりの、最新のエビデンスや研究、取り組み”とともに、心肺蘇生の臨床・研究に熱意をもって取り組まれているエキスパートの先生方から紹介・解説いただく特集を企画しました。推奨・提案を示さなければならないガイドラインや指針では記載が難しいテーマも、本特集では深掘りして取り上げられています。そして、そのようなテーマこそが、現場で真に心肺蘇生をどうすべきかの工夫や検討につながるとともに、魅力的で奥深い心肺蘇生研究の道へ読者の皆さまを誘うことでしょう。

さあ、あなたも、心肺蘇生の世界の深淵へ、一歩踏み出してみてください。

特集企画ゲストエディター：救急振興財団救急救命九州研修所教授 畑中 哲生

特集企画協力：帝京大学医学部救急医学講座教授 坂本 哲也